The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明日に向かって
Author(s)	織田, 幸彦; 三上, 喜美男; 榊, 正明 他
Citation	モンゴル研究. 2018, 29-30, p. 82-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102449
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〓創刊 30 号記念特集〓

明日に向かって

「明日に向って」原稿募集の会員宛てメール

1975年に第1号を発行してから40余年、研究会の発足からも45年余りが経過したこと、発行が30号を数えることなどを記念した企画です。

私たち会員も、年齢は世代が違う（？）と言えるほど多様となり、生き方も多様、社会とのかかわり方も年数もまた多様です。各自のこれまでの経験を踏まえて、今の社会をどう考え、現在から未来へとどのように社会とかかわり生きていくのかをともに考えてみたいと思います。そこで、「明日に向って」というテーマで雑感を募集し、合評会でも議論したいと考えています。気恥ずかしいなどと思わず、この機会にいろんな意味でそれぞれの原点を確認し、ともに「明日に向って」考えてみませんか。

文芸的な未来と私

織田　幸彦

「モンゴル研究」30号おめでとうございます。

第４号に寄稿してから早いもので、４０年近くになります。あの頃にくらべて、日本は文芸的になったと思います。世界中と気軽にＩＴ媒体で送受信される時代となり、若い人達の文化への関心と理解は深まり、個々の芸術性は高まっています。また、大旅行時代が到来し、こちらからも出かけて行くし、近隣アジア諸国からも手頃な運賃で行楽に訪れます。この国の伝統的な模倣主義と生真面目な修養が産み出した変格の文化を、心から楽しんでいるようです。

未来の日本はその国力・資力の衰退とは無関係に、芸術の洗練と退廃を繰り返し、交流し、世界中を楽しませるでしょう。

私はといえば、旅行代理店に就職し、ツアーコンダクター等しながら日々を送りました。その経験はありふれたツーリズムの範疇ですが、それでも、小さなのぞきからくりができました。

教会前で同行の観光ガイドがスリの手先の幼児を容赦なく足蹴にします。彼は倒れ、私は立ち尽くします。観光船ではコインを川に投げると子供たちが潜って拾います。
厳冬の空港では時限爆弾の脅威があり、装甲車の機銃が乗客に向けられています。荷物検査機の傍らには熊のような兵士が自動小銃を構えています。置き引き犯は捕縛され、私の目の前で警官に殴打されます。
牧民の湖は花盛りで白馬が草を食み、パゴーダでは雨期明け祭の燈明が揺らめきます。
　移民が眠る真夏のメトロ駅、灯火管制、喧噪、匂い、停電、「サイコ」のオープンセット、古城ホテルの怨霊、城壁、検疫、ペスト、幽閉、運河、孤独、鐘楼、森、雷光、沐浴、螢、風、、、、

世界は全て物語です。これからは部屋にこもり、記憶の断片を拾い集め、少しずつ思い出し、反省し、一人称で語りましょう。
「ひとつ、お聞きなされて、下さりませ・・」

（おだ　さちひこ）

二つのモンゴル

三上　喜美男

モンゴルについて思いを巡らせれば、いつも同じ記憶、同じ場面にたどり着く。

左右に見開いた地図帳を食い入るように見つめる自分の姿が脳裏に浮かぶ。

地図帳といっても現代地理ではなく、世界史の興亡を示した歴史地図帳だ。幼いころから世界地図を眺めるのが好きだった僕にも、そのページの持つ迫力は格別だった。

ユーラシア大陸の大半が、東から西までぶち抜いたように、同じ系統の色に塗りつぶされている。中国は完全にのみ込まれ、モスクワやバグダッドも占領されている。その先も後の時代も、地続きでこれほど版図を拡大した勢力は存在しない。まさに空前絶後のスケール。「モンゴル帝国」である。

一番熱を込めて地図を見つめたのは高校生のころだろう。モンゴルの兵士が馬にまたがってはるか西の果てまで遠征する。京都の田舎の高校生には、大陸の広さは想像もつかない。モンゴル高原を出発した伝令がハンガリー平原に駐留する遠征軍の本拠まで「ハーン死去」の知らせを伝えるのにひと月ほどかかったと知り、ため息をついた。

胸躍らせたのは、モンゴルの騎馬軍団が破竹の勢いで欧州勢を撃破したことだ。アジアがこれほどヨーロッパを攻め立てた例はほかにない。なにせ、ポーランドとドイツの連合軍をリグニッツァ（ワールシュタット）の戦いで撃破したのだから。大河ドラマのような合戦絵巻が頭の中で回る。

もし途中でモンゴル帝国のハーンが死ななかったら、チンギスハンの孫バトが率いた欧州遠征軍は帰郷せず、さらに西のイタリア、フランスへと侵攻しただろう。そうなれば世界の歴史は随分変わったに違いない。想像を巡らせては、胸を躍らせた。

その「モンゴル熱」をあおったのは井上靖の「蒼き狼」であり、司馬遼太郎の「街頭をゆく」５巻の「モンゴル紀行」だった。かたやチンギスハンの物語であり、かたや同時代に誕生した草原の社会主義国の牧歌的な点描である。玉手箱を開いたようにその世界にたちまち感化され、高校３年の秋に英語・英文学志望を急きょ変更した。モンゴル語科を目指したのは、ある同級生が語ったように「青春の血迷い」といえるかもしれない。

大学で初めてモンゴル語を学び、歴史物語ではない本物のモンゴル人と出会うことになる。それはそれで新鮮で興味深く、学ぶことは多かった。だが、実を言うとそれらは「モンゴル帝国」に傾倒した若き血迷いの十分な受け皿とはならなかった。かくして、ロマンと現実の「二つのモンゴル」が、僕の心の中に併存し続けることになる。

「二つのモンゴル」が一つに重なったのは、神戸で知り合った留学生のバト君が欧州遠征軍を率いた将軍と同じ名前で、かつての民族の栄光（特に遠征軍の強さ）を大いに誇りにしていることを知った時ぐらいだろう。だから３年前、アウシュビッツ強制収容所跡の見学のためにポーランドでモンゴル欧州遠征の歴史の跡に触れた時は、子どもの頃になくした宝物を見つけたように胸が高鳴った。

世界遺産の古都クラクフはモンゴル軍に攻められ、灰燼に帰した歴史がある。その受難の記憶は、

教会の塔で消防士が1時間ごとにラッパを吹き鳴らす通年の儀式として今日まで継承されている。モンゴル襲来を知らせる物見の兵士がモンゴル兵の放った矢に射抜かれ、警報のラッパを吹く途中で死んだという逸話を伝えている。現地の若い女性ガイドがそうした由来を丁寧に説明してくれた。

それだけではない。初夏の宗教祭には、馬にまたがったひげ面の「ライコニク」というキャラクターが登場して街を練り歩くそうだ。欧州人が「タルタロス（地獄の民）」と呼んで恐れたモンゴル兵がモデルという。ただし、ライコニクは今では「幸福を運ぶ使者」として子どもたちに親しまれている。恐ろしい外敵がいつしか人気者に変身した。長い時の流れが災厄や恐怖を祥啓の兆しに転化し、地域の祭礼へと昇華する。歴史がそうやって人間に「和解」を促しているのだとすれば、いきな計らいに思える。

過去はさまざまに形を変えながら、人々が継承する記憶の中で生き続けるのだろう。そうした歴史の伏流水に触れる。それは旅人として僥倖というほかない。

大学を出てからは「二つのモンゴル」のどちらともあまり縁のない生活をしてきた。しかし時折、モンゴルとの関わりは思わぬ贈り物をくれる。留学生バト君との語らいやクラクフでの体験がひときわ印象に残るのも、若き日の「血迷い」があればこそ、だろう。

次はどんな語らいや体験が待っているだろう。日ごろはほとんど意識しないが、モンゴルとの出会いは、還暦を前にした今もそれなりに進行形である。

（みかみ　きみお　1981年卒）

時空を越えて繋ぐもの

榊　正明

1970年の夏の小豆島での6人の「合宿」を起点とすれば、モンゴル研究会は2020年に、創立50周年を迎える。逆説的に聞こえるかもしれないが、一切の会則を持たず、また持とうともしなかったことが、自由で柔軟な運営を可能にし、半世紀に亘る継続を保証してきた大きな理由の一つかもしれない。併せて、創立の当初から今日に至るまで、研究対象であるモンゴルだけでなく、自国、即ち日本の現状への関心と関与を意識しながら活動を続けてきたことも、この研究会の大きな特色と言えるだろう。それにしても、よく継続してきたものだ。思い起こせば様々なことが頭を過るが、この2つの特性を継承しつつ、この稀有な研究会が今後とも更に創造的に発展することを願っている。

継承といえば、私が副理事長を務める日本ユーラシア協会が、昨年の秋に創立60周年記念行事の一つとして開催した「ロシア革命100周年記念講演会」で、講師の和田春樹氏が、ロシア革命が世界に残したものの一つとしてのその「反戦・反軍の思想」が、思想的な系譜として、第二次世界大戦後の日本における「平和国家論」、「平和憲法」にも繋がるという非常に示唆に富む指摘を行った。巨視的に見れば、一つの思想が時空を越えてそのように具現するものなのかと、改めて感じ入った。

この和田氏の講演に触発されてか、心に描いてきた年来のテーマに取り組んでみようかという気になっている。それは、20世紀の初頭から1910年代と1920年代に、西欧の文化と思想、より限定的に言えば、マルクス主義と社会主義思想が東アジアの国々でどのように受容され、それぞれの歴史的背景と社会的現実との中で変容していったのかという、壮大なテーマだ。その最も主体的な事象としての、1920年のモンゴル人民党（後の人民革命党）の創立、21年の中国共産党の創立、22年の日本共産党の創立と、その前後の時期のそれぞれの「受容」と「変容」の立体的な探究を主要な課題としたいと考えている。

もとより、自己の能力と限られた残りの時間を考えれば、どれほどのことができるか心もとない気もする。あるいは、先行研究を学ぶだけで終わるかもしれない。しかし、若き日々に考えた「モンゴル革命の特殊性と普遍性」の分析の視点を東アジアの全体に広げてみようという試みでもあり、できるところまでは進めてみたい。奇しくも、今年2018年は、カール・マルクス生誕200年にあたる。その年に、新たな課題に取り組むのもよいのではないかと思っている。

（さかき　まさあき）

足元の希望をその先へ紡ぐ

三原　裕子

19歳で初めてモンゴルの大地に立ち、天上ではなく、自分の足先から真っ直ぐ向こうに満点の星が見えたとき、生まれて初めて宇宙を感じました。そして、自分という存在がいかに小さくて無力か、自分が生かされている世界がいかに大きくて偉大か、瞬間的に私の身にインプットされたその感覚を、今でも忘れません。その翌年から1年間のモンゴル留学は、自分が培ってきた常識や考え方が180℃覆される日々で、1年後、まるで別人のようになって帰国したわたしに、家族が戸惑うほどでした。20歳のわたしには、日本で身につけた常識とモンゴルでの1年間に得た‘新しい常識’をうまくコントロールできず、その後も随分家族や友人達に心配をかけることになりました。

けれども、その後大学を卒業し、就職、結婚、そして、いま2児の母として子育てに追われる日々を送りながら、やっぱりわたしはあのときモンゴルに出逢えて良かったとの確信があります。違う国の言葉、違う国の文化や歴史、思想は、わたしに、自分の常識に囚われない柔軟な感覚を養ってくれました。おかげで、自分のお腹から生まれたのに性格も感覚も全く違う小さな人たちの所作や言動を面白いと思って尊重してあげられる余裕が少しはあります。新聞やニュースもろくに見られず夜は子らと一緒に寝てしまうけれど、沖縄や福島で同じように子育てしているお母さんたちに寄り添うココロもあります。ママ友と痴話話のついでに、核兵器廃絶国際署名や9条改憲反対署名を呼びかけたりもします。

昨年末、『民衆の敵』というドラマを観ました。平凡な主婦が、家族の幸せを求め、ママさん議員になり悪戦苦闘する物語。月9史上最低の視聴率だったそうですが、作中のセリフには考えさせられるものがたくさんありました。「私たち一人一人の無関心、それこそが民衆の敵」関係ないと知らぬふりをするのだけはやめたい、微力でも、行動していたい。そう決意新たに2018年を歩み出せるのは、あの、モンゴルの大地に立って感じた‘わたしはちっぽけな存在’の感覚が、決して消極的なものではなく、生かされていることへの感謝、大地への畏怖の念だったからに他なりません。

（みはら　ひろこ）

平和に生きるため歴史と向き合う

松村　晴恵

モンゴル国立大学での２年間の留学を終えたのが1986年９月。帰国したら予想通り「浦島太郎」状態で、しばらくは外に出るのもいやだった。モンゴルに戻りたくなり「逆ホームシック」になったのを覚えている。

修士論文を書かなければならないし、卒業後の就職先もどうなることやらという状況のせいだけではなかった。それ以前に、日本社会でやっていけるのか、不安だった。生活は便利だが、息が詰まるような生きづらさのある社会。細かな気遣いが求められ、おおらかさに欠ける。「男尊女卑」が根強いことも改めて痛感した。日本社会のそうした側面は今も変わらず、むしろ昨今「空気を読む」とか「同調圧力」とよく言われるように増幅している面がある。

それでもなんとか日本社会に適応し（？）、一つの職場で勤続30年超となった。モンゴルについてはおろか、「明日に向かって」じっくり考える間もなく仕事に追われ気味だ。ただ、社会人になってモンゴルを訪れたときの旅行記を含め、書きためてきたものはウェブページ「モンゴル見聞記」（https://mongoltemdeglel.jimdo.com/）にまとめている。

「明日に向かって」生きていくのに重要なものは平和と医療だと思う。生きづらい日本社会にあって世界に誇れるものはつまるところ、日本国憲法と医療の国民皆保険制度ではないか。日本の食や自然、文化がいいと言っても、どの国であれ「住めば都」だ。命に関わる安心感は何にも代えがたい。日本人が戦後、戦争の惨禍にさらされることなくこれたのは憲法９条に依るところが大きい。

ところが、憲法も医療もかなり危うくなってきた。医療保険制度は改悪に次ぐ改悪。憲法も安倍政権下「安保法制」成立で解釈改憲され、国会は「改憲勢力」が３分の２を占めている。

日本国憲法はその前文にもあるように侵略戦争の反省の上に成立した。だが、明治以降の植民地支配・侵略に関する歴史認識が社会にどれほど根づいているだろうか。私自身、学生時代それなりに近現代史を勉強したつもりが甚だ不十分だった、と社会人になって思い知る。

歴史学者、山田朗氏が「改憲問題は歴史認識問題である」とし、「司馬史観」とも称される「明治時代に対して高い評価をする歴史認識が、戦後の民主主義に対して低い評価をする認識を支え、改憲への強い志向性をもたらしている」と指摘している（『日本の戦争：歴史認識と戦争責任』2017年12月、新日本出版社）。

歴史認識や戦争責任をあいまいにしたまま９条改憲に突き進めば、再び軍事大国化・軍国主義の道を歩みかねない。明日に向かって平和に生き続けることを願い、主権者の一人として、歴史の真実に向き合い学び続けたいと思う。

（まつむら　はるえ）

「ほとんどない」から「6日に一回」、今はほとんど毎日モンゴル

荒井　幸康

1989年入学、平成をモンゴルとともに過ごした荒井幸康と申します。

研究会ができて45年以上、そして、『モンゴル研究』の30号、おめでとうございます。

この30年ですが、大学一年生の頃から、毎週水曜日の例会に集まるモンゴルに関心を持つ人々との交流や様々な発表で得た知識の蓄積の上に自分なりのモンゴル観とモンゴルへの関心を育てていけたことが、今につながっている、と改めて思いました。

芝山先生をはじめとしたモンゴルに情熱を捧げた大先輩の方々、田渕さん、秋山さんといったちょっと上の諸先輩方、同期入学した山田さん、横田さん、高田さん、山内さんたちとの議論で大いに刺激を受けました。

入学した頃、巷の話題にモンゴルがあがることはほとんどなく、モンゴル語を学んでいるといったら、モンゴルってどこにあるのという質問もいくつか受けた記憶があります。最初にモンゴルに行ったのは1992年7月。モンゴル国ウランバートルの第23中学校の日本語の先生として1年間いましたが、その頃から早25年もの月日が経ちました。

象徴的だったのは、1993年帰国時に偶然会った大島部屋と書かれた黄色い浴衣を着た方々。その中には旭鷲山や旭天鵬もおられたと思います。まだ、幕下にもなっていなかった頃でした。今調べてみましたが、まだ彼らは19歳とか20歳だったんですね。

彼らの活躍でモンゴルは大いに認知され、2007，8年ごろだったと思いますが、モンゴル人に日本事情を通訳した際に、先生との話の中で、「いまや日本で6日に一回はテレビでも話題に上る。というのも相撲場所は年六回15日、つまり90日はモンゴルのことが話題に上る」とお話されていました。

モンゴルの認知度は十分上がったといえます。

時代は流れて…… 2017年終わり、2018年の初め、今モンゴルの話題は毎日のように出てきます。

ただ、どちらかというと、相撲で勝てない日本の力士を見る観客のうっ憤を晴らすような論調でいささか残念な気がします。一時の問題で時が過ぎ去れば、こんな話はもう忘れられてしまうだろうと思います。

満州を体験し、モンゴルといわず「蒙古」といい、中国と混同する世代がありました。この世代の人々は、かなり少なくなってきたと思います。今、語られるモンゴル人は、新たに生まれている別のイメージの中にあるものだと思います。遊牧民であることや、真実かどうかわからないけれど、報道されるモンゴル人力士の態度から判断して、安易に馬鹿にして語る人、あるいは、熟慮せずに自分らの垂れ流す言葉は伝わらないだろうと思っている人がいることは残念に思います。

一方のモンゴル人は、今のところ日本人にかなり好感を持っているように思います。それだけにこ

のような状態が続けば、日本人はモンゴルを理解しないのだとそっぽを向かれないかなととても気になります。

モンゴルを大学時代４年間「勉強してしまい」、モンゴルに対してその後も何らかの関心を保っていらっしゃる方、運命とは言いませんが、おそらく何らかの縁を引き受けてしまったように感じます。

かくいう私も、モンゴル国から始まり、ブリヤートやカルムイクにまで行って縁を広げてまいりました。その後もモンゴル系のいる人がいる各地の人々との縁がいつの間にか広がっています。

日本でのモンゴルの縁はそれなりに広がりましたが、それをいい方向に向かわせるお手伝いをしつつ、そのほかのモンゴル地域とまとめて、日本との縁をつないで行ける、そんな活動をこれからも続けて行ければなあと思います。

（あらい　ゆきやす　亜細亜大学、青山学院大学、一橋大学、東京大学等兼任講師）

「何のためのモンゴル研究か？」の問いを引き継ぎながら 考え続けたい

T. エネビシ

私は2013年から日本の大学院に留学し、その時からモンゴル研究会の会員になり、1975年から2013年までの『モンゴル研究』を手に入れて目を通している。モンゴル社会を舞台とする数多くの出来事や人物の人生が流れ、まるで歴史の映画を見ているような気持ちになって、悲哀や喜びを感じながら読んでいる。

各号の前書きがまた興味深い。そこからモンゴル研究会をどのような思いで立ち上げ、何を大事にしながら続けてきたのかが読み取られるからだ。発足当初からモンゴル研究会の会員の一人ひとりが共通して常に問いかけてきたのは「何のためのモンゴル研究か？」という問いであったようである。一人で考えるより皆でと、同じ考えを持つ学生たちは夏の合宿を行い、そこから研究会の歩みが始まった。研究会の会員は各人の生き方に引きつけて考え、その生き方が絶えず問い直されるような研究を心掛けていくことを大事にしている。

『モンゴル研究』におけるあらゆる投稿の中身は単純な善悪の評価で終わるのではなく研究対象とするその時々のモンゴル社会の現状を通して日本社会を見直す、世界を見直す態度を示している。そして取り上げる問題の本質に触れて問題提起し、考えたことを書き残している。

先人たちのこの蓄積を吸収しながら、「何のためのモンゴル研究か？」という問いも引き継いで考えていきたい。そのために「何が大事なのか」ということを常に意識して、それに自分の問題意識や研究を合わせていきたい。

（T. えねびし）

歴女になるには …… ♬

吉本　るり子

最近「私の常識」が揺らぐときがある。

「私の常識」は、主として親からもらったものとたぶん学校教育で学んだものである。

母は私から見ると人格者で、主に専業主婦だったが、母親の在り方が私の行動の基準になっている。

母は両親とも早くに亡くし、しっかり者の祖母に育てられた。折りにふれ、諺のような祖母の言葉を引用した。「昔の人（お祖母さん）はこう言いました」と。

社会的な常識は、戦後民主主義が名残りを留めていた小中学校時代に学んだ。

そんな「私の常識」が、「え！そうなん？」と何かとぶつかる時がある。一方で、学んだ歴史が本当の歴史じゃないと考える時がある。

「歴女になりたい」と私は思った。本当の歴史はどうだったんだろう。何か忘れてきたのでは。できれば、民の論理と存在形態を探求してみたい。負けた側は「○○の乱」と記され否定される。ひょっとしてそこに何かがあったのでは。支配の論理、軍（力の）論理、資本の論理に圧されて、民の論理を見失ってきたのでは。その実態も隠されて。民の倫理と在り方を探求すること、意識すること、覚えておくこと、伝えること、それが大事なのでは。

手掛かり、足掛かりは？　今のところ、日本史では網野善彦、モンゴル関係では Sh. ナツァッグドルジの著作である。Sh. ナツァッグドルジの『ЧИНГИС ХААНЫ ЦАДИГ』は翻訳してみた（『チンギス・ハーン』2016年、アルド書店）。今年は Sh. ナツァッグドルジ生誕100年記念に当たり、著作集10巻本が出るそうだ。とにかく読んでいこうと思っている。もう一つの手掛かりは口承文芸である。無意識の領域の何かがそこにあるのでは、と思っている。

「ほっとけない！」『モンゴル研究』とモンゴル研究会。やって来た中で、そう感じる時があった。廃刊の話が何度か出た。でも「ほっとけない！」せっかく皆で築いてきた土俵なのに、このまま、放棄していいのか？と思った。資金難。でも預かった原稿がある。電子版で継続することになった。

ウラン開発問題。今岡さんが送ってくれた画像を見て驚いた。このときは、モンゴル研究会内に核問題研究会があって、その問題提起の集会を手伝った。『モンゴル研究』28号は核問題特集号になった。

この29・30号記念号で区切りとし、最後を飾るという話もあった。しかし、次号への投稿も予定されていて、研究会は当分、続きそうである。脈々と？　そうそう、先日例会で聞いた鉱山開発問題。「ほっとけない！」と感じている。何ができるかは今はわからない。

行き当たりばったりだけど、モンゴル研究会には出会いがある。出会いを大切にしたい。わらしべ長者の人生訓である。

「歴女になるには …… ♬」（中島みゆきの「悪女」のさびのメロディーで）と、出鱈目に口ずさみながら、今日も私はあがいている。

（よしもと　るりこ）

子育てはモンゴルで

野本　悠紀子

私は2018年1月現在、これまでに5回モンゴルに渡った。最短で5日間、最長で3ヶ月間滞在した。ウランバートルの他に、10以上の県に訪れ遊牧民の家庭でもお世話になった。モンゴル滞在期間を全て足しても半年と満たない短い期間ではあるが、そこで多くの事を学んだ。今回は子どもに対する私の考え方の変化を中心に書きたい。

もともと私は子どもが苦手であった。まず、何をしゃべっていいかわからない。兄妹・従兄弟の中で末っ子ということもあり、年下の扱い方にも慣れていない。本来人見知りということもあって、子どもと一緒に場を共有するということが得意でなかった。

2度目にモンゴルを訪れた2015年の7月に、モンゴル西部に位置するバヤンウルギー県に行った。ウランバートルから長距離バスで行ったが、その時の移動時間は42時間、2泊3日の行程だった（最近では道路も舗装され、24時間で行けるようになっているらしい）。そんな長い時間バスの中で過ごしていると、乗客同士も仲良くなる。バスの乗客は同じカザフの故郷に帰省する人たちばかりだったから、誰かがカザフ語の歌を歌うと、乗客30人ほぼ全員で大合唱が始まる。その中には子どもも何人かいた。

最初は彼らの親や祖父母世代の人たちと話していたが、いつの間にか、彼らとカメラで写真を撮ったり、ぬいぐるみで遊んだり、質問をし合ったりし、気づけば友達になっていた。今になって思うと、子どもたちが知らない国の知らない大人である私に怖がらず、好奇心旺盛に話しかけてくれたことで私の緊張もほぐれていったのだと思う。

その後、行く先々で子どもに出会った。どの県の街でも田舎（遊牧地域）でも、人がいるところには子どもがいた。そして、どの子どもも人懐っこくて無邪気だった。

それには、大人の中に子どもを大切にしよう、きちんと育てよう、という認識が広くあることが深く関係していると思う。もちろん自分が親であれば自分の子どもに対してそういう意識は働くだろう。が、他人の子どもに対しても同じように接するのが「モンゴル流子育て」だと感じる。仮に日本の電車である子どもが騒いだとすると、それを咎めるのはその子どもの親である。たまに注意せず放っておいたり、自らも大声で話したりする親も見かけるが、他の乗客は我慢するか見て見ぬ振りをすることが多い。こんなことを書きながらも、私自身他人の子どもを注意する勇気はない。

ところが、モンゴルでは勇気や遠慮などが入る隙はない。ゲルの中では親か否かに関係なく大人が子どもを注意し、叱り、ときには慰めるという場面をよく見かけた。公共の場でもそうかは定かではないが、日本の「我関せず」な態度よりは優しいものであってほしい。そんなことから、将来子どもができたらモンゴルで子育てをしたいな、と思うのである。

（モンゴル、日本と単純に一般化して比較はできないが、今回は便宜上特に定義をせずに「モンゴル」「日本」と表現した。）

（のもと　ゆきこ）

老害となることを危惧しつつ

山本　雅博

私は1970年4月に大阪外国語大学モンゴル語科に入学しました。諸先輩のお誘いをいただき、モンゴル研究会の初期の時期から、活動に参加するようになりました。しかし、私はまともにモンゴル研究というようなことをやったことはなく、どちらかというと、大阪外国語大学を、まともな学問研究のできる大学らしい大学にしようという当時の学生運動の中の一環として、モンゴル研究会の活動に加わっていたと思います。

ところが、私の次の世代の人たちからは、本当にモンゴル研究に取り組もうという人たちが続出してきました。その時点で私は、モンゴル研究会が質的に変化した、もちろんいい方向にですよ、と思ったので、もうこの人たちにまかせようと思いました。その後のモンゴル研究会の歩みは皆さんご存知のとおりです。

大阪外国語大学を卒業してから半世紀近くたつ、しかもまともにモンゴル研究などやっていない私はモンゴル研究会の「明日に向って」というテーマで何を書けばいいのか？ 編集担当の吉本さんから再三原稿依頼を受けながら、私にそんな資格があるのかという躊躇もあって、ずっとお断りしようかと迷って出すことができませんでした。しかし、自然な今の気持ちを書けばいいんだという助言もいただいたので、エイヤッ !! と少しだけ書くことにしました。

今はそうではないのかも、とも思いますが、私はモンゴル研究会の主役はあくまでも現役の学生であるべきだと思っています。OB、社会人は研究会の活動に参加することを歓迎しますよ、というスタンスであろうと。OB、社会人の本物の研究者としての活動は学会などでやってもらえばいいのではないか、と。で、本来現役の学生が主役であるはずと思っていることを前提にして、私の意見を言わせていただけるのなら、明日に向ってのモンゴル研究会の活動は、モンゴル研究を深めるということと、学生生活をより有意義なものにするということを両輪にしてほしいと思っています。そして、外国研究をすることの目的のひとつは、自国の課題を正確に理解することにつながるということをおっしゃる方々もいます。私も同感なので、そういう視点を持ち続けて、日本の、世界の明日をどうするのかという問題意識も持って、モンゴル研究を更に深めていってほしいなと思います。そして、本物の研究者は、前途有望な若者を応援してやってください。そして、たまには年寄りの素人も誘ってください。

まともなモンゴル研究の実績もない私にいつまでも声をかけていただけることの幸せを感じながら、そう !! これがモンゴル研究会の魅力のひとつなんですが。老害となることを危惧しながら書いてみました。大病を患いながら今何とか生命を永らえているので書かせてもらいました。失礼があればお許しください。更なる発展を期待しています。

（やまもと　まさひろ）

安倍政治が再び日本を崩壊させる

松岡　正喜

― ウソが政治を支配している ―

昨今の新聞報道やテレビの国会中継を見ていると、腹立たしいことばかりでウンザリする。安倍政権は公明・維新をとり込み、多数を良いことにやりたい放題だ。裁量労働制のデータの採り方・比較の仕方のでたらめさ、それでも押し通そうとする。加計問題での、自衛隊スーダン日報問題でのウソ。森友問題でのウソにつぐウソの連続。極めつけは、財務省の国有地のタダ同然の払い下げ疑惑だ。政権は元の文書を改竄してまで1年間も国民にウソをつき続けてきた。この文書改竄は財務省だけでできるものではない。改竄せざるを得ないよほどの事情が背景にあったからこそ、やらなければならなかったし、できたと見るべきである。この度し難い、真実をまげて隠ぺいし、ウソをつく体質は何によってもたらされたのか、考えてみた。

― 隠ぺいとウソつきは歴代政権の体質 ―

今年で戦後73年になる。ドイツと異なり、戦後の政治の中枢に戦争勢力の一員だった政治家や官僚が残り、息を吹き返した。彼等が「大東亜戦争」を総括し、改革を試みた面を否定はしないが、徐々にトーンダウンし妥協と変節を重ねた。背景には「連合国総司令部」名称のアメリカがいた。あの戦争に「負けた」ということを、「なかったこと」にして戦前を総括することを放棄し、アメリカの言うがままの構造に身を置いた。またそれを希む勢力があった。東西の冷戦がはじまり、日本が東アジアの反共のトッププランナーに据えられ、それゆえに戦争を総括をする必要性が削ぎ取られた。どこに問題があるのか曖昧にし、かかわった人物や組織・制度における責任の所在をなおざりにした。以来こんにちまでこの構造が続いている。いわゆる「永続敗戦論」である。沖縄の基地問題・核もち込みや貯蔵は言うまでもなく、郵政民営化・TPP・原発依存など経済やエネルギー政策に至るまで実体を隠し、ウソをバラまいて進められてきた。モリ・カケ問題もその構造に根差している。真実を知られたくないため隠ぺいする。なかったことにしたいがゆえにウソをつく。

― 小選挙区制・政党助成金の導入による政治の劣化 ―

政界と財界の癒着を改め、政権交代の可能な2大政党制をつくる目的で20年余り前に導入されたこの制度は、失敗だった。いつでも政権交代できる「健全」な2大政党制を築くことがこの国の政治を良くする、というキャンペーンがマスメディアを通じて繰り返された。異論を述べようものなら、「守旧派」のレッテルが貼られた。果たして、そうだったのか。当時賛成の立場で世論（せろん＝ popular sentiment）誘導の一端を担った人が、いま露呈している政治の劣化の最大の要因がここにあると悔いている。

余談になるが、この時の NHK の解説員は「推進者」の立場でものを言っていた。「公共放送の NHK は、

皆様の受信料で支えられています」はウソだと思った。公共性が担保されていないと思った。以来受信料の支払いをお断りするようになった。何度も玄関先で集金人の方と議論したが、いまだ納得のいく回答をいただいていない。

この小選挙区制によって、歴代自民党政権の行き詰まりから保守連立政権、後の民主党政権へと権力の担い手は変わった。が、中身は変わらなかった。民主党政権への期待が大きかっただけに、この政権の失敗は決定的だった。市民・国民もこの政権の限界を見抜けていなかった。安倍自民党を再び政権の座につけてしまった。

小選挙区制は、もともと多数の議席を占めてきた自民党に有利な選挙制度である。一票でも足りなければ、有権者の多様な意見は議席に結びつかない。少数であっても多様な意見を取り入れる寛容さを奪い、多数を占めた政党が多様な意見や考えを排除しても構わないという制度上の根拠をあたえてしまった。「民主主義的手続」による独裁への道が開かれたと言っても過言ではない。ナチス・ヒトラーも同様の手続きを経て権力をにぎっていた。

この制度が導入されて四半世紀を経たが、政界・財界の癒着は変わってはいない。税金によって運営される政党は「国営政党」化し、自主性・独立性を大本のところで失った。「民主主義にとっての必要経費」論は「身を切る改革」を放棄した体の良い言い逃れにすぎない。

このような制度の中で議席を手にした政党に、自らの議席が付与された市民・国民の日々の営みに存在する不満・不安の原因は分からない、ましてや希いはなおさら分からない。むしろ政党の論理が優先し、それを達成するための行動の原理でしかない多数決の横暴を、何の痛みも感じることなく押し通すことを専らとするようになった。説明責任を果たさない。ウソと言い逃れでその場を取り繕うことに終始する。政治が一部の権力者の私物と化す。政治の劣化以外の何物でもない。

―強欲資本主義が世界を壊す―

こういう政治がファシズムを生み出す。第１次大戦後のヨーロッパ・東欧・南米・日本を見れば明瞭である。不戦条約や和平への努力が戦後の国連憲章へとつながったが、それ以上にファシズムが世界を席捲し第１次大戦の教訓が生かされなかった。今また世界は同じ轍を踏もうとしている。

国家機密法を2013年に強行し、'14年には集団的自衛権を、'15年には平和安全法制の法的整備法（＝戦争法）の強行、'17年には共謀罪法と矢継ぎ早に「安全保障」関係法の強行採決をくり返した。「安全保障」関係法で外枠を固め、内には聞こえのいい政策スローガンでごまかし人口に膾炙（かいしゃ）しようとした。しかし、もとより実体を伴うものではなかった。

経済の低成長が叫ばれて久しいが、その根本要因である経済の空洞化に目を覆っている。むしろさらにその方向を強めようとしている。国民生活の安定的な維持と向上（＝教育・福祉、医療・介護・年金、最低賃金・労働時間）のための国民本位の改革は眼中にはないのだ。400兆を超える企業の内部留保は投資に回さず、回せずマネーゲームの原資だけではなく、海外生産への移転の基金として蓄えられている。

資本家にとって日本はもはや市場ではなくなった。資本主義は行き詰りにぶつかっている。資本主義の危機は戦争に転化して乗り切ろうという衝動を引き起こす。ゆえに政治的・軍事的危機をあおり、外交や対話の可能性を躍起になって否定する。

数年にわたって、「安全保障」関係法を強行に「整備」したのは、この経済危機・資本主義経済構造の行き詰まりを将来的に「乗り切る」ための法的・軍事的な地ならしをするために他ならない。軍事的に海外へ出て行くためには憲法が邪魔なのである。スーダンに自衛隊を派遣し、しかも日報の存在を「破棄」したとウソをついてまで否定した。イスラエルでは IS を敵にまわす「経済援助」発言をして、日本人を救出しようとしなかった。何れもこんご資本による利益獲得の「新天地」を開拓する意図と結びついていた、と言っても言い過ぎではない。

― 単線的・切り分け的歴史観に異議あり ―

明治維新（＝1868年）から今年で150年になる。この150年を安倍政権は祝賀ムードで演出する中、とりわけ戦前の75年で欧米列強に劣らない「近代化」を達成したことを自賛し、「この道」に間違いはなかったと誇り高く唱えるだろう。

150年の歴史を単線的に今日の近代化と繁栄を築いた「輝ける」時代として評価する見方がある一方、前半の75年はまだ明治は良かったが、大正・昭和と時代が下がるにつれて悪くなり、やがては日中戦争、アジア・太平洋戦争へと突入していったという捉え方がある。それはアジア・太平洋戦争の悲惨な結末のみを取り上げて、その時代だけは評価できないという歴史の切り分け論的評価と言える。どちらの見方も問題がある。前者はこの150年の歴史的過程を戦前の75年も、戦後のそれも連続して見る捉え方である。あいだにアジア・太平洋戦争の敗戦という歴史的画期があったということを見落としている。見落としている限り、なぜ戦争に突入したのか総括する考えは生まれない。後者の場合は、戦前の75年の歴史を分割した捉え方である。しかし、その切り分け論は、生れたばかりの明治国家が進取の精神で、はつらつ活動し新国家建設にまい進した成功物語として描きたいというものである。明治・大正はそういう時代であったと。

しかし、歴史の事実に基づけば成立しない。明治の初めから天皇の神的権威を発揚することで新国家の統合が図られ、神祇官が設置されて神道の国教化が図られた（王政復古の具体化）。これは中途で挫折するが、国家神道の道は引き続き追及された。同じ時期に廃仏毀釈が行われた。この神道国教化への衝動が明治帝国憲法・教育勅語に結びつき富国強兵政策とともに侵略的国家体制が作られていった。いわゆる「国体」の祖型の完成である。神道が道徳的権威の中心に据えられ、他の宗教と別物扱いされた。明治の中頃には「脱亜入欧」や「欧州的帝国」論が唱えられ、日清戦争へ至る「準備」が整えられていった。日清戦争後は台湾を植民地化し、遼東半島を清朝から割譲させた。

日清戦争は、やがて朝鮮半島の領有をめぐる日・露の対立を導き、列強の中国侵略の糸口を開いたと言える。このように見ると、戦前の75年を明治は良かったが、大正・昭和と時代が下がるにつれて悪くなったと切り分けて捉えることはできない。

日本近代の歴史を連続して直線的にとらえる今の政権は、戦後を「不甲斐ない、『伝統と誇り』を失った時代」としてみているだろう。でなければ、「美しい強い国を取り戻す」といえないはずである。なぜなら、彼らにとって明治はもとより、アジア・太平洋戦争に突入した時代こそ「美しい強い国」であったと捉えているからだ。歴史に向き合い自国の侵略戦争に謙虚に学べない国は、再び同じ過誤を繰り返す危険性を孕んでいる。

さて、仕事を辞めてこの数年、隠ぺいとウソで固めた安倍政治を批判し声を上げてきた。寒風の吹

く日も、暑熱が照り返す日も、街頭に立ちマイクを握った。街ゆく人にどういう訴えが届くか、日々考えてきた。憲法が前文でいう「・・・政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し・・・」を実現するために与生を使いたいと考えている。

私事だが、先年亡くなった父は、戦争末期に兵役法で中国戦線に狩り出された。軍歴が残っているはずだと聞いて調べてみた。予想していたよりも詳細が分かった。父は栄養失調でマラリアと脚気を患っていた。甲種合格・柔道は黒帯だった。敗戦までの軍籍は長くはなかったが、食料は現地調達だった。食うや食わずのまま何日も行進させられひもじくてどうしようもなかったと、私が小学校の頃よく話していた。また、「戦争は二度とするものじゃない」とも。中国湖北省の高粱畑の平原をひたすら行軍していた姿を想像している。

村で同級生３人のうち２人が戦死していた。もし父も戦死していたならば、私はこの世に生れていなかった。戦争は人の命を奪い、運命を変えてしまう。戦争について考え、行動せざるを得ない与生となってしまった。

＊与生は余生（余った人生）ではなく、「与えられた人生」という意味で使った。

（まつおか　まさき）

まずは知ること そして やってみること

味方　慎一
ＮＰＯ法人もみじ（国際交流）代表

今から17年前 淀川の河川敷を舞台にして世界の天幕を数基組立てて国際交流の催しをしたことがありました。この時からゲル（モンゴルの移動式住宅）との出会いがはじまり、それ以降深く関わることになるとは・・それだけゲルには人を引きつける魅力があるのだと思います。家が動く？ 長年建築に携わる者として、強いカルチャアショックを受けた記憶があります。2003年にゲルを所有し、催しなどで活用したり小学校でゲル授業をしたり、と多岐にわたる使い方をしてきたのですが、回数を重ねるごとにやればやるほど興味が広がっていきました。

異なる国や民族の「衣・食・住」をツールとして体験し体感しながら理解を深めてもらうやり方は、基本的な方法です。特に「住」には人々の営みのあらゆる事象が凝縮されています。環境や慣習に順応した住まいづくりや、長年蓄積された知恵とか工夫とかが住まいという形になって見ることが出来ます。でも 衣・食・住を体験すると言いましたが、「住」はそう簡単には揃いません。モンゴル遊牧民の紹介では、ゲル（住）をその場に持ち込み、くみたてる、というようにそれが可能なのです。

私にとってもゲルを通じて得た知識はモンゴルの風土や生活ぶり、そして人々の営みを理解できる大切なツールになっています。机上の学習だけではなく、ゲルを実際に組立て解体してみたり、その空間をいろんな活用して考えることは、ある種の“現地に行かないフィールドワーク”かもしれません。環境や風土の異なる地でやってみるとお互いの違いが鮮明にわかることも多く、そこがまた面白いところでもあります。

モンゴル研究会には最近参加させてもらうになったのですが、モンゴルという大きなテーマがあって 個々あらゆる角度からの発表内容は私の好奇心を刺激します。いままで気がつかなかった視点を知って、新たな問題意識がでてきます。 まずは知ることから・・。

（あじかた　しんいち）

ふわーっと幸せに

内田　敦之

この短い原稿を出すために何度声をかけてもらったことだろう。一億総余裕なしの日本にあって、モンゴル研究会のすごさを再認識した。ようやく出すことができました。とても感謝しています。

昨年は年明け早々、左足骨折からスタートした。凍結した車道で自転車が激しくスリップして転倒、腓骨・脛骨がポッキリ折れた。「一寸先は闇」を実感。ほんの一時間前にはウジムチン、ホルチン・モンゴル人らと梅田のセンベロで自由と人権について少し熱めの議論をしたばかりだったから。即手術となり、夏の抜釘までボルト６本＋ビス７本＋プレート１枚と共存することに。動けるようになって再びモンゴル国に出かけた時、チャハル・モンゴル人のエクチが「四肢のケガは大きな災いからあなたを守るためだったのよ」と。確かにその通りだと思った。転倒した時、頭を打ったり車にぶつかったりしていたら…。仕事も動けるようになったタイミングで入ってきた。テンゲル（天）が手を差しのべてくれたのか。近ごろは出かけると、近くの寺や神社で手を合わせるようになった。

50をすぎて心身も少しくたびれてきて、残り時間も短くなった。自然災害（ほとんど人災だろう）もけっこうある。売国奴らのために国家は破たん寸前ではないか。時間との闘い。刹那的になるわけではないが、生き急がねば。

以前から気にはしていたが、骨折でしばらくヨボヨボ歩くようになって日本人がますます怖くなった。街ではみんな恐ろしい形相ですれ違い、追い抜いていく。「どけっ」と言わんばかりににらみつける。社会的に弱い人びとはいつもこんなに怖い思いをしていたのだ。歩行者も自転車も自動車も容赦なし。何が「日本人は思いやり」だ。新宿駅で一瞬横を向いて話していると、ガツンと肩にタックルを食らわされた。ぶつかった小柄な女性は全く振り返ることなく人ごみに消えていった。

何かに追い立てられているようで、みんな余裕がない。そのはけ口を他人に向ければ「いじめ」で、自分に向ければ「自死」、どちらも地獄だ。外見は恐ろしいが、中身はふぬけな日本人たち、何とかならないものか。

自身の責任だが、公私とも思ったようにはいかない。ただ、それでも、ふわーっと幸せを感じることがある。年を取っただけなのかな。近くの「幸福温泉」（ただの銭湯）のサウナと水風呂で心身がゆるんだ時、早朝の澄みわたる青空に美しい月を見た時、立ち飲みでイカの沖漬け（自家製に限る）を肴に冷や酒を飲る時、ドラマやアニメに思わず心が動いて涙がにじんだ時、など。年を取っただけなのかな（たぶんそうだろう）。痩せこけた体型は相変わらずだが、心身はほぼ健康だ。好きなこともやれている。きっといい人たちにいつも囲まれてきたからにちがいない。私は幸運だったのだと思う。これまでがむしゃらにやってきて混沌としていたものが近ごろ少しつながり始めた驚きと幸せもある。

まだしばらく動きそうな心身を動員して残った時間にやるべきことをやろう。

私は「宣教師」ではない。それでも、自分に見えて聞こえていることは人に伝えなければならないだ

ろう。と言っても、うまく伝える方法がいまだにわからない。ただ方法が見つからなくても、自分はとにかく動いていこう。これまでどれほど人に迷惑をかけて、つながりを断ち切って生きてきたのだろうか。残った時間で少しでも穴埋めできるだろうか（それは都合が良すぎるよな）。

日本人とモンゴル人、みんなの明日に向かって歩きつづけたい。

（うちだ　としゆき）

この世界の片隅に暮らす

吉本　周平

モンゴル人民共和国に留学した時、「日本はどんな国か」「日本人はどういう人たちか」「どういう暮らしをしているのか」とよく質問された。経済や政治のしくみをおおまかに伝えることはできても、結局は答えに窮した。山国、雪国、平野部、大都市や過疎の村、北海道、大阪、沖縄… 自然その他の地理的条件は多様、暮らしも多様。人？ 顔が次々に浮かび、いろいろやなぁ。以来、「モンゴル」「モンゴル人」を主語にして一括りにすることに慎重になった。

たったの２年間、おおむねウランバートルの大学周辺に限られた狭い範囲ではあったが、そこに実際に暮らしてみれば、多様でいろいろだった。学生寮にはモンゴル人学生だけではなく東欧、西欧、ソ連、北朝鮮やベトナム、カンボジア、ラオス、インド等からの留学生もいたが、「おんなじや」という思いを持った。「良い子」「悪い子」「普通の子」「おまけの子」ということか？ 同じだけれど、一括りにはできない。くくると人が消え、国や国民、政治家、軍、党、資本家、労働者、消費者、生産者などだけが残り、薄ら寒く不気味だ。固有名詞のない世界には生きている実感はなく幸せもない。

教育の世界に入ったが、そこも同じだった。生徒だと一括りすることはできない。ましてや成績や進学先などの数値で…そこに学びはないし喜びもない。みんな違う、つまりは人の世界なのだ。家族の中に育ち、やがて家庭を持ったが、同じだ。一人一人違う顔をもつかけがえのない大切な人たちだ。母や多くの身近な人を亡くした。かけがえがないのだ。だからこそ自分の中に生き続けているのだろう。時をともにすると、人も、自然も、物もますますかけがえのない存在となる。

生きるということ、暮らすということはこの世界の片隅のかけがえのなさの中にあるのだと思う。その暮らしを守る努力を社会として手をとりあってしなければならないはずである。災害があり、戦争があり、原発事故、格差と貧困、孤独死や過労死がある。都会暮らしであっても、大自然の中の世界であることを忘れず、工夫を凝らし暮しつつ、人間の貪欲に起因する大小様々な人災を防ぐささやかな努力を肩肘張らずにできる範囲でこつこつする。孤独な片隅ではない。片隅同士、つながりができていくだろうし、そういったつながりの力が何かを変えてくれるかもしれない。かけがえのない片隅の、そのかけがえのなさを深く理解し共感したそのつながりこそが世界となればと思う。そして何より、人をくくらず、人を道具にすることなく、高をくくらず、いろいろくくらず、かけがえのないこの片隅で暮らし、ささやかな生をまっとうしたいと思う。

（よしもと　しゅうへい）